**№56　テーマ『感性論哲学の根本原理』**

**講話日2013年11月1日**

**皆さんこんにちは。今日は感性論哲学の根本原理というテーマでお話をさせてもらいたいと思います。感性論哲学というのは、これまでの哲学史にはなかった、まったく新しい哲学で感性というものを根本原理にして、いろんな問題について考えていくという哲学なんですよね。この名前がどうしてついたのかと言うと、感性論哲学というのは「人間の本質は感性だ」また「命の本質も感性だ」、そして「宇宙の究極的実在も感性だ」と考えますので、感性という原理で宇宙と世界と人間というのが繋がれているという体系ですので、そういうところから感性論哲学という名前になったということであります。**

**今どうして感性論哲学という新しい哲学が必要なのか、というところからお話を進めていきたいと思うんですけど、今全世界的に激動・激変の時代と言われ、あらゆる分野において原理的変革が求められています。あらゆる分野において、原理から変えていかなければならないという状況が、どういう風にして出てきたのかということなんですけど、激動・激変の原因というものが、大きく分けて二つあります。それはどういうことなのかというと、これまで世界の中心となり、また世界の主導的役割を果たしていた欧米の国家群・世界が、ようやくその役割を果たし終えて、これからはアジアに世界文化の中心が移ってくるという状況が、もう誰の目にも明らかになってきました。そういう意味では、世界文明の中心が西洋から東洋へと移行していくという大きな変動が今生じているわけであります。**

**ヨーロッパというのはもうすでに、中世から近代にかけて歴史を牽引する役割を終えてしまった国家群ですし、またアメリカも近代のここ200～300年の歴史の中で指導的な役割を果たしてきたわけですけど、そのアメリカも時代の流れとともに役割を終えて、だんだんと政治的にも経済的にも軍事的にも、世界から後退するというか、引いていってしまっているという状況で、やはり、だんだんと衰退に向かうという流れであります。かつては地中海のギリシャのアテネが、大きな力を持って、政治的にもまた文化的にも世界に大きな影響を与えていたんですけど、だけども今や単なる地中海の一都市として存在するだけで、あまり大きな影響を与えるような活動はできていません。もっと古く言えば、エジプトもやはり古代においては大きな力を持っていたんですけど、だんだんだんだんと歴史の流れの中で衰退して、今日に至っているという状況であります。イギリスなんかでも世界の海を支配するような時代があったわけですけど、だんだんと国力も衰えて、そしてヨーロッパの一大国として存在するに至っております。とにかくは欧米諸国が、人類史を牽引していく役割を終えて、これからは確実にアジアが発展して、人類史を形成していく、指導的な役割を果たすという状況になってきているわけですね。こういうところから、西洋から東洋へという大きな世界文明の中心の移動というものが起こっている。そのことから、いろんな考え方や価値観や物事の判断基準が変わってきて、そしていろんな分野で原理的変革が求められるという状況になってきているわけですね。**

**もう一つの大きな激動の原因というのは、これまでは理性というものを原理にしていろんな問題に対応してきました。理性を原理にして科学技術文明というものをヨーロッパはつくってきたわけですけど、ようやく理性を原理にした活動というものが、今大きな曲がり角に来ていて、大きな問題を抱えてしまっている。これはどういうことかというと、近代社会は理性を原理にしてあら**

**ゆるものを合理化し、理性的に問題を処理するということをやってきたわけですけども、その結果として科学技術文明という大きな文明が成長してきました。だけども、その結果としてどうなってきたかというと、今は自然破壊、環境破壊、人間性の破壊という問題が出てきています。理性を原理にしていった結果、自然が破壊され、環境が破壊され、人間性が破壊されるという状況になって、非常に大きな問題を今世界に与えているという状況である。こういう状況において、人類は本当にこれからも理性を原理にして生きていってもいいのか、という反省が今精神史、文明史的に出てきているということですね。**

**その意味では、人類は理性に対する盲信から目覚め始めた。あるいは理性への絶対的信頼が揺らぎ始めたという状況になってきており、これを理性の揺らぎという風に言われていることなんですけども。理性的に生きることによって人間性が破壊されて、そして血の通った温かな心遣いが消えてしまって、そして考え方の違いや価値観の違いや宗教の違いで多くの人が対立をして、果ては戦争をして殺し合うという状況まで出てきているわけであります。これは理性を原理にして生きてきた結末というか、現実である。一体こういう状況、問題をどう乗り越えたらいいのか。**

**人間性の破壊というのは、結果として離婚の激増、幼児への虐待とか高齢者への虐待という現象として出てくるわけで、これをどう乗り越えるかということは、今の人類に課せられた非常に大きな問題であります。また環境破壊や自然破壊といわれるものも今一番大きな問題になっている中国において、健康を害する非常に大きな問題としてクローズアップされてきているわけですね。これもやはり理性というものを原理にして人間が活動することによって、つくられてきた環境破壊という風に言うことができるわけであります。また自然破壊というのも科学的な心理に基づいて人間が自然に対応する、自然に対処することによって、自然の在り方が、歪められて破壊されるという状況になってきている。**

**これはどういうことなのかといったら、科学というのは世界をいろんな領域に分けて研究するんです。物理学は物理現象だけを研究する、化学はケミカル的な現象だけを研究する、生物学は生物を対象とした研究をする。また意識における心理学は、心理の、意識の世界を研究する形で、科学は世界を分断して研究するわけなんですね。ところが本当の自然、世界というのは、どこかで線引きがしてあるわけではなくて、あらゆるものが有機的に関係し合って、影響し合って動いているというのが本当の生きた現実の自然・世界の姿であります。それを分野だけに限って研究することによって、物理現象というものが化学の現象にどう影響を与えるのか、あるいはケミカルの、化学の原理がどのように生物学の世界に影響を与えるのか、という相互の影響というものを全然考えないで、それぞれの学問がそれぞれの分野で掴んだ真理と言われるものをその分野で使って、いろんな研究をしている。**

**ということは何なのかといったら、自然科学は残念ながら有機的な自然の在り方を破壊する、殺してしまっている状況が出てきているわけであります。近代科学というのは、そういう有機性というものを理解することができない。各分野で領域ごとにいろんな研究をするけども、その研究が他の世界にどう影響を与えるかという有機的な影響の及ぶ研究は全然なされていないというのが現実なんですね。そういうところから自然科学の考え方は、命がある有機的な自然というものを破壊してしまって、そして自然破壊、環境破壊的なものが出てくるという結果になっております。**

**そういう意味では、西洋の学問として発展してきた自然科学の在り方というものは、残念ながら本当の生きた自然から言うと、間違ったと言うかあるいは本当の生きた自然の姿というものを捉えることはできない、有機性を捉えることはできない、各分野で限定された領域のことしか言えないという形で西洋の学問は現在も行われています。これが学問が自然の有機性を破壊する、そのことによって自然破壊や環境破壊、人間性の破壊が出てくる。なぜ、理性的に科学的にものを見ると人間性が破壊されることになるのか。人間というものもイコール理性ではない、と。人間は理性もあるけども、感性もあり、肉体もある。理性・感性・肉体がお互いに影響し合いながら、その相乗効果としてつくり出している命が、人間の命というものの現実でありますし、また人間性と言われるものも理性だけではなくて、感性と肉体というものが絡み合って人間の本質である人間性というものをつくり出していると、言うことができる。これが、有機的な物事の理解の仕方であります。**

**それが本当の生きた現実であるとするならば、理性・感性・肉体が有機的に絡み合ってできてくる命というものを単に理性の観点からのみ理解しよう、また理性で人間の問題を処理しようとすると、結果として感性や肉体というものの価値と言うか、存在というものをあまり顧みないで、理性的に人間をみてしまうということになってしまうと、どうしても人間の見方が理性的に偏って歪んでしまうわけですね。そういうことから、理性的にのみ人間の問題を処理し、理性的に合理的に物事を処理していこうとすることによって、人間という有機的な存在というものが歪められてしまって、そして破壊されてしまって、有機的な相乗効果として出てくる血の通った温かな心とか人間性というものが……有機性も壊れるものですから、人間性も壊れてしまって、血の通った温かな心も消えてしまう。そういう状況で人間性の破壊といわれる現象が出てきているわけであります。**

**とにかく我々は、今日まで科学を信じて生きてきたんですけども、科学的な物事の考え方というのは、自然破壊や環境破壊や人間性の破壊という問題をつくってしまったということからすると、科学的な考え方というものも、やはり人間が作為的につくり出した考え方であって、これも偏見だという風に考えなければならないということになってきます。本当に正しい自然に対する理解というのではなくて、理性によってどういう風に見えるかという、理性的に偏った考え方というものが、科学的真理だという風に言うこともできるわけですね。そういう意味においては、我々は理性を原理にしてこれからも生きていったならば、ますます自然破壊や環境破壊、人間性の破壊が進んでいって、本当の生きた自然、本当の生きた命というものを理解できない、あるいは理解できないだけではなく、破壊してしまうような状況に陥ってしまう。理性を原理に生きることによって、自分自身の生き方というものを歪めてしまって、人間性あるいは血の通った温かな心というものを失ってしまうような状況に自分自身を追い込んでしまう、今日の科学的なものの見方、理性的なものの見方のみに立脚して、いろんな事柄に対応しているということの問題点であります。**

**そういう意味では、科学は非常に大きな力を持った学問として、今日も存在しているわけですけど、これは学問としては、ある意味で偏った偏見というものをつくり出したという風に言わなければならない。そういう意味では、西洋の自然科学というものは時代的な役割を終えて、そしてだんだんと学問の在り方自体も変わっていくという風にも考えなければならない状況であります。とにかくは、理性を原理にして合理性を追求した結果、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊が起こ**

**ってきた。どうして科学的にものを見て研究して、真理と言われるもので自然に対応すると、なぜ自然が破壊されるのか、という理由をちゃんとわかっておいてもらいたいと思うんですね。またこれから全人類がそのことをちゃんと意識しながら、これからの学問の在り方を考えていかなければならないと思います。**

**とにかく、まずちゃんと理解しておいてもらいたいのは、科学というのは全体の自然というものを細分化して、一定領域における事実を追求する、真理を探究する、ということをしており、その結果として自然全体の有機性というのが学問によって破壊される。そのことが破壊というものをもたらす原因なんだと。もっともっと本当は、いろんなものが有機的に絡み合って影響を与え合って世界は存在している。ですから、本当に自然に、生きた自然を理解しようと思ったら、物理的な世界と化学的な世界と生物の世界と意識の世界が、どういう風に有機的に影響し合って存在しているのかという研究を本来していかなければ、本当の世界・自然というのは理解できないはず。だけど、現代の欧米の科学技術文明というのは、お互いに影響を与え合っているかということはあまり考えないで、それぞれの分野だけの研究をして、事実を探求して真理をつくるということをしており、それがために自然の持っている有機性が破壊されて、自然破壊という現象が起こってきているのだということですね。**

**環境破壊というのもやはりそういうことで、ある一定の分野においては効果のある原理も、他の世界にどういう影響を与えるかということを考えないでやっていると、結果として環境が壊れてしまうという有機性を無視して、生産をしたりエネルギーを使ったりした結果、思わぬところで環境が破壊される、空気が汚れる、水が汚れる…いろんな弊害が出る。食品添加物なんかでも、その食品自体においては限度内の食品添加物であっても、人間はいろんなものを食べますから、複合汚染といって、いろんな食品添加物が人間の体の中で融合されてしまうことによって、思わぬ毒物が発生するような、そういうこともあり得るわけです。複合汚染と言われるような、環境の有機性を全く考慮しないでいろんなことが行われている。その結果として、中国の困った環境の問題が出てきているというわけです。日本でも過去、四日市ぜんそくと言われるような大きな公害がありました。それを乗り越えて、今日の人間が住むに適した環境を維持するような力を獲得するようになったんですけど、これは空気の汚染だけではなく、水の汚染も土壌の汚染など、いろんな環境破壊はまだまだ世界中で出てくると思います。これも有機性を無視する、本来は有機的相乗効果というものがあるのに、それを無視していろんな問題に対応していく理性的な人間の活動が環境破壊をつくっているんだと、考えていかなければならないし、反省しなければなりません。**

**人間性の破壊というものも人間の命が持っている有機的相乗効果を全く考慮しないで、理性だけで対応しようとする…そこから人間の有機的な命の在り方が壊されてしまって、人間性の破壊、さまざまな病気が出てくるわけであります。これは有名なジークムント・フロイトが、理性による人間の支配というものは精神の病の原因であり、またさまざまな内科的な病気の原因となる、という根本原理を発見して、今日においてもその考え方がどんどん発展して、心療内科とか精神内科といわれるような心因性の病というものを考えなきゃならんというのが、今非常に大きな病気というものを理解する方法論になってきているわけであります。理性というものが、いかに有機性を破壊して人間を苦しめ、病気をつくり出すか、ということがフロイトの考え方においても証明されているわけであります。そういうことから、本当にこれからも我々は理性を原理にして生きていってもいいのか、という問題が突きつけられているわけです。**

**まだまだ会社の中でもほとんどの仕事や作業が、理性的あるいは合理的に能率本位で行われているという状況が、多々ありますし、また夫婦関係でも理屈で物事が処理されている、親子関係も理屈でなされており、学校に行っても理屈、社会に出ても理屈、まだまだ理性で、理屈で物事を処理し対応するということが、行われているわけなんです。その結果として、夫婦関係に摩擦が生じ、親子関係は壊れて、そしていろんな人間関係に理性的な対立ということが出てきている。それを考えれば、どうしたら我々は理性的に生きるということから脱却できるのか、そういうことを考えなければならない時代になってきました。**

**そういうことから、多くの方々が「理屈じゃない、心が欲しい」という叫びをあげて、「理屈はたくさんだ」と、「自分が本当に求めているものは自分の心を満たすものだ」という叫びをあげているわけであります。そういうことから、これから我々が理性に変わって何を原理にしていったらいいのかということの暗示がそこに含まれているという風に言うことができます。もちろん理性も大事なんだけど、それよりも我々が大事にしなければならないものは心だ。心というものは感性、感じるものですので、心は感性の領域のものですけど、これから我々は理性を超えて、感性を原理にした生き方を考えていかなければない。心を大事にした生き方を考えていかなければならない。また、そういう時代になっていくんだということが予想されるわけであります。**

**では、なぜ、これから我々は、理性を超えて感性・心というものを原理にし、大事にして生きていく、またそういうことを考えながら、心を大事にして仕事をするという状況に、なんでそういう風に持って行かなくてはならないのか。その必然性、根拠はなんなのか。なぜ、これからは感性の時代になるのか。なぜ、これからは感性文明、感性文化をつくっていかなければならないのか。なぜ、これからは心が大事なのか。そのことを学問的には、どういうことを考えなきゃならんかということなんですね。**

**これは精神の歴史という精神史というものがあります。その精神史を辿っていくと、そのことから、これからの時代は感性という精神原理を大事にしていく時代になっていくんだ、ということがはっきり見えてくるわけですね。これはどういうことなのかというと、何で近代は理性の時代になったのかという原因を考えていくと、その原因は中世にある。中世というのは、宗教とか信仰と言われるような、非合理で不条理な力によって人間が支配され、抑圧されていた時代なんです。非合理で不条理な力によって人間の命が支配され、抑圧されるという状況になってくると、人間の命の中に眠っている合理への要求が目覚めてくるという構造が命に出来上がるんですね。非合理で不条理な力によって支配されると、理屈を言って反抗したくなってしまう…そういう合理への要求が目覚めてくるということになってきます。これは一般の心理的な現象においても、理屈に合わんことを相手が言ってくると、理屈を言って反抗したくなっちゃうという構造があるわけですけど、そういうどんな人間にもある心理的な構造が、人類史において展開されたのが中世から近代に至る精神の変転と言うか、精神世界の変化の原因だという風に言うことができるわけですね。非合理で不条理な力によって、人間が抑圧されると合理への要求が目覚めさせられて、そして近代は理性の時代になってしまったわけであります。**

**近代は理性によって人間が支配されて抑圧されて、すべてのことを合理的に処理しなきゃならない…そういう活動をしてきた。理性的で合理的な力によって人間が支配される。そのことによって、近代人は理性の奴隷となって、非常にストレスの多い、抑圧のある生活を今しているわけです**

**けど、理性的で合理的な力によって人間が支配されると、命の中に眠っている非合理的・非理性的な力が目覚めてくるという構造ができるわけであります。そのように考えていくと、命の中に眠っている非合理的・非理性的な力とはなんなのか。それが感性であり、心だと。そういう流れが精神史によって見えてくるわけであります。そういうことを考えると、確実にこれからの時代は、理性に代わって感性が人間の活動の本質となり原理となるんだという流れが見えてくるわけであります。**

**そういうところから、理性に代わる新しい原理は感性だ、感性が人間化されたものが心ですから、だからこれから我々がつくっていかなければならない世界は心の世界、感性を大事にする生き方や仕事の仕方というものを考えていかなければならない時代に入るんだ、と言うことができるわけですね。その意味では、経済社会もこれまでの資本主義経済のもとでは、企業というものは仕事の繋がりと役職の繋がりという、合理的につくられた理性的な組織の中で人間は働いてきました。理性的につくられた仕事の繋がりと役職の繋がりという中で働くことによって、多くの人がストレスを感じ、精神的な抑圧、理性的な働き方をしなければならないというところから、能率本意な働き方になってしまって、無理をして体を壊す、あるいはなかなか仕事が思うようにいかないということで、ついつい焦ってしまってノイローゼになってしまう、ということも起こってくるわけであります。**

**そういう理性的につくられた会社・企業の在り方から、これからはどういう会社の在り方に変えていかなければならないか。人間の本質は理性ではない、心で感性だと言われる人間観の激変が、今起こっているわけです。近代は人間を本質は理性だと言ってきましたけど、これからは人間の本質は理性ではない、人間の本質は感性だ、心だと言わなければならない。そういう人間観の激変が今世界的に起こっているわけであります。それを背景にすれば、人間の本質は理性ではなくなって、人間の本質は心・感性になったんだから、だから企業も人間の集団であって、そして人間の本質が心であり、感性だということになってきたんだから、企業の在り方も一番大事にしなければならないものは、全社員の心の繋がり、心の結びつき、心の通い合い、心の絆を根底に据えた団結力をつくっていかなければならない時代に入ったと言うことができるわけであります。その心の繋がり、絆というものは、理屈を超えた人間関係ですよね。それは、心の通い合い。それをベースにし、その上に仕事の繋がり、役職の繋がりを乗せて、三次元構造でこれからは会社をつくっていかないと、本当に人間が生きがいを感じて楽しく働ける人間的な企業というのは、つくれないということになってくるわけであります。これからの感性の時代における企業の在り方で最も大事にしなきゃならないのは、理屈を超えた心の繋がり、心の結びつきだ。これが大事にされることによって、企業は人間的な企業となり、労働することを通して人間としての生きがい、喜びを感じるという風な職場がつくられてくることになるわけであります。そういう意味においても、人間観が人間の本質は理性だという近代のものから、人間の本質は感性だ、心だというものに激変しているという状況が、経済的にもやはり考えられていかなければならないわけですね。**

**とにかく、現在の激変というものの根底に二つの大きな要因がある。**

**一つは、世界全体が西洋から東洋の時代へと文明の中心を移し替えている。それからまた理性の時代であった近代は終わり、そして理性ではない感性というものを原理にした新しい時代が始まろうとしています。外の世界においては西洋から東洋へ、内的な世界においては理性から感性へ、という大きな原理的な変化というものが、今いろんなものに影響を与えて、そしてあらゆるもの**

**が原理的に変わっていかなければならないという状況をつくり出しているんだということですね。これが今日の激変・激動の根本原因ということができるものであります。**

**ということは、今は時代そのものがこの時代に生きる人間に、「激しく変われよ」と叫んでいると理解することが出来るわけですね。我々はこの時代に生きる人間として、そういう時代の大きな変化というものを受け止めて、自分自身を激しく成長させている。またいろんな周りの環境があり、いろんな物事を原理から変えていく、という激しい変化をつくり出すという活動をこれからしていかなければならないと、言うことができるわけですね。**

**特に、人間というのはなんのために生まれてきたのか、我々が生まれてきたのは、歴史をつくるため、新しい時代をつくるためだ。新しい時代をつくろうと思ったら、何をする必要があるのか。新しく時代をつくろうと思ったら、我々は過去の人間がまだ誰もやったことがないことを何かやって生きて死んでいく、という思いを持って活動しなければならない。歴史をつくるためには、過去の人間がやったことのないことをしないと、歴史はつくれません。その意味においても、今の時代の人間には原理的変革という、原理から物事を変えていくような活動が求められているということになるわけです。表面的なアレンジメント、創意工夫というものでは、今日の時代の要請に応えられない。原理から変えていく、そういう生き方や仕事の仕方をしなければならない。そういう意味では、仕事において歴史をつくるとはどういうことなのか。今自分のやっている仕事において、今まで誰もやったことのないことを何かして、「俺はこの仕事に歴史をつくるんだ」という思いで、我々はこの時代を生きて仕事をする必要があるんだと言うことができます。とにかく、激変・激動というものが我々の生き方にどういう影響を与え、我々に何が求められているのかを考えなければならないと思うんですね。**

**時代というものは、今西洋から東洋へ時代・文明の中心が移り変わっているという状況にあるとお話をしましたけど、歴史というものの動きを考えてみると、歴史というものはその時代の中心を担う風土と民族と国家と思想というものを移し変えながら、世界史は動いているんだということがわかってくるわけであります。実際問題、今日の世界の歴史の出発点は、アフリカ中部の大地溝帯でした。そこから、北部のエジプトに行き、やがてメソポタミア地方に行って、そこからこのペルシャ、ギリシャ、イタリア、ヨーロッパ、イギリス、アメリカという風に時代の中心を担う風土を移し変えながら、今日に至っているわけであります。そして、ようやくアメリカが国家としての最盛期を過ぎて、衰退の時期に入った。そしてこれからはアジアが発展して、アジアが世界の歴史をつくって中心的な地域になっていく。そういう風土を移し替えながら歴史はつくられていくんですけども、風土だけではなくてその上に住む民族も変わっていくし、また時代を担う国家も思想も変わっていく。そういう構造で歴史というものは動いているわけです。時代が変われば哲学も変わる。哲学は時代の子だと言うことができる。そういう意味では、これまでの時代においては、理性というものが時代をつくっていく原理になって、近代は発展してきた。これから風土が西洋から東洋へと変わっていくことになれば、当然そのことによって時代を担う民族も国家も思想も変わっていく、という風に考えなければなりません。**

**西洋の思想というか、考え方というものの根底に何があるか。ギリシャ以来、西洋における人間観というのは能力主義と言われ、ギリシャにおいても人間の本質は理性と考えられて、個々の人間の本質は「アレテー」と言われて、何ができるか、どういう能力を持っているかということが、そ**

**の人間の本質を意味するんだと言われた。いわゆる能力主義といわれるものとして能力を大事にする、それが人間の最も価値あるものだ、と考えることはギリシャ以来、ずっと西洋世界に流れている大きな原理なんですね。西洋人はそういう意味で能力の優れた人を尊敬するという人間観を持っておりました。現在でもそうです。**

**だけど、今日の文明の在り方から言うと、人間は理性・能力を原理にして、素晴らしい物質文明、科学技術文明をつくってきたけれども、人間性が全然成長してないじゃないか、むしろ人間の品格は全世界的に落ちっぱなしだというのが、今の文明における大きな問題点であり、近代の科学技術文明社会の大きな課題になってきているわけであります。物質的にこんなに豊かになったのに、人間性そのものが全然良くなっていないと、そういうところから今日は物質文明から精神文明へと、文明の在り方が期待されている状況になってきているわけですね。西洋の思想からすると、人間の本質は理性だと考える人間観が強くて、人間の価値を測る基準というのが、理性能力のレベルによってが判断されるということが西洋においては非常に多いですね。だけどこれからは能力も大事なんですけども、今は人間性が破壊されるような状況が出てきておりますので、これからはもっともっと人間性を成長させる、人間の品格をつくっていくことを考えないといけない、そういう要請が文明史的に出てきているわけであります。**

**だけど西洋の考え方からすると、人間性はヒューマンネイチャーと言われるわけなんですけども、西洋人はヒューマンネイチャー、すなわち人間性というのは神から人間に与えられたものであって、人間性は変わらないんだと。人間性を成長させるとか、人格を磨くとかという意識は西洋人には全くないと言って過言ではありません。西洋人というのは、能力の優れた人は尊敬するけども、人間性に優れた人を能力の優れた人程は尊敬しない…そういうところがあって、むしろ人間が努力して成長させることができるものは能力であって、人間性ではない。人間性は決まっているんだから、成長させるとかそういうのじゃないんだという考え方が西洋にはあります。ですから西洋人は理性能力を磨いて、手段にして、物質的な豊かさや金銭的な豊かさをつくっていく。そのことに成功した人間を尊敬するという風土が、西洋の基本であります。**

**けれどもアジアというのは、能力がある人よりも金がある人よりも物がある人よりも、人間性において優れた人を尊敬するというのが、アジアという風土がつくり出した文明の基本的な形であります。ですから今でもタイやビルマなんかに行くと、托鉢をして歩いている僧侶たちがたくさんいて、托鉢で庶民からわずかながらのいろんなものを恵んでもらうんですね。それを糧にして彼らは生活をするようなことをしているんだけど、多くの人々はそういうことをして歩いてる僧侶に手を合わせて、そして拝んで尊敬するような習慣、文化を持っております。**

**そういう意味においては、西洋の能力主義というものと、アジアの人間性を尊重するような風土とでは、文明・文化の形、本質が違うんですね。そういうことからすると、これから時代は能力主義から人格主義へ、文明の形を変えていかなければならない。そういう流れが西洋から東洋へと時代が移っていくことによって出てくると考えなければなりません。もちろん能力も大事なんだけど、能力よりも大事なのは人間性を成長させることだ、人格を磨くことだという意識が、これから強くなってくると思います。残念ながら西洋人には人間性を成長させるという意識がなくて、人間性は神から与えられているものだから、ヒューマンネイチャーなんだから、だから人間は人間性に目覚めなければならないのであって、神から与られている人間性に目覚めて気づかなけれ**

**ばならないのであって、人間性を成長させたり、人格を磨いたりということは、西洋人の頭の中にはないんですね。理性的な能力は優れて、そしてお金持ちになったり、成功したりということによって、付随的に、結果的に人間性も良くなるというか、人間性も成長するということはあるかもしれませんけど、残念ながら思想的には人間性を磨くとか人格を磨く、人間性を成長させるという概念がそもそも欧米にはない。彼らが唯一、努力の目標とするものは能力、何ができるかというアビリティ、タレント、理性能力を磨くということが、最も大きな人間的成長の課題だという風に考えているわけであります。**

**実際問題、我々が人格と言っている言葉を英語で調べると、パーソナリティ、キャラクターという訳語が出てくるわけです。我々が人格と言っているものは、まさに尊敬に値する人間の立派さを言っているんですけど、英語の場合、パーソナリティ、キャラクター=個性とか性格という風に訳されているわけですよね。個性や性格というのはあまり変わらないものですから、だからそういう意味では、欧米人は人格を磨くとか、人格を成長させるという意識は全く言葉というものにおいても存在しない、という風に言うことができるわけであります。だけど、これからは全人類の人間性の進化、人間性の成長、人格を磨くということが一番文明史的には期待されており、要望されているという風に言うことができます。その意味においては、ようやく時代の中心が西洋から東洋へ、そして東洋という風土がまさに人格を磨き、人間性を成長させるという文明をつくってきた風土ですから、そういう意味においては、中心が西洋から東洋へと変わることによって、明らかに人間の考え方、思想というものも激変するという風に言うことができるわけであります。西洋の能力主義からアジアの人格主義へという変化が今期待されているということであります。**

**人格を磨くという概念、人間性を成長させる意識というのは、アジアにしか存在しない。そういう意味では、時代が変われば哲学も変わる、思想も変わるということを考えれば、これまでの欧米の理性を原理にした哲学の在り方、理性を原理にした学問の在り方というのは、明らかに役割を終えた文明であるという風に言わなければなりません。時代というのは、その時代時代においてその時代の中心となる精神原理が変わっていくんですよね。古代というのは、力の支配というものが非常に尊敬された時代でしたので、力というものを尊敬するような時代でした。中世というのは、宗教心というものが限りなく磨かれて、成長した時代でした。近代は理性能力が成長した時代でした。そのようにして、時代によって中心となる文化、精神原理が違ってきてるわけですね。そういう流れを考えていくと、明らかに理性を原理にして人間が成長する時代は近代において終わった。これからは感性を原理にして、心を原理にして、心を大事にして文明・文化をつくり、仕事や生活をする時代に変わっていくんだと考えなければなりません。**

**時代が変われば、哲学も変わる。理性を原理にした時代は終わったんだ。これからは感性を原理にした新しい哲学、考え方、価値観をつくっていくことが要請されている。そして、アジアという風土は感性の実感を大事にする文明をつくってきたものなんですね。仏教にしても悟りと呼ばれるものはなんなのかと言ったら、肉体を動かして掴んだ気付きを感性の実感として表現するという形で仏典はつくられました。肉体を動かして行動を実践して、そして結果として感性が掴んだ気付きというものを言葉によって表現する、それが実は悟りという風に言われるものであります。また中国の儒教とか老荘思想でも、人間がいろんな活動をして体験を積み、経験を積んだ結果として築いたものを言葉にして本が出来ている、というのが中国の儒教や老荘思想の内容であります。そう考えると、アジアという風土は、理屈で物事を考えるというものではなくて、感性の実感**

**というものを大事にする、本音とか実感を大事にするものと言うことができるわけであります。**

**そう考えると、我々はこれからはどういう意識の変化というものを持たなければならないのか、ということなんですけど、これまでは人間の本質は理性だと言っていたんですけど、理性というのは皆に共通するものをつくる能力で、真理は一つと考える、だから理性能力というのは、皆に共通するものをつくるという能力なので、理性的になればなるほど個性がなくなる。理性的になればなるほど自分から遠ざかるというものだ、と言わなければなりません。我々が私・俺・自分と言っているものは、実は理性ではなくて、感性における本音であり実感であり、また感性から湧いてくる欲求や欲望や興味・関心・好奇心…そういうのが我々が私と言っている、自分自身の本体なんだ、という自己認識、自分というものの在り方、そういう変化を強く自覚していかなければなりません。我々が私と言っているものは、実は欲求のことなんだ。欲求がないということは、自分がないということなんだ。欲求がなければ、したいことがなければ、他人に言われたことをさせられてしまう。他人に言われたことをするのは奴隷だ。本当に自分が、自分の人生をつくっていきたいと思ったのなら、我々は命から欲求が湧いてこなければならない。そのことによって俺の人生をつくることができるんだ。自己実現というのは欲求を実現することである。また自分の本音と実感を成長させることが自己実現の道を歩むということなんだ、と考えなければならない。**

**理性能力というものは、本当の自分ではなくて、自分の欲求を実現するために使わなければならない、手段能力である。そういう考え方をして、理性と感性の価値の逆転を図っていかなければならない。なぜなら、西洋では感性は理性よりも下等な能力だと考えられて、感性は蔑視されていました。感性というのは動物的な卑しいものだ、という意識で考えられて、理性こそ高尚で高度な能力なんだと考えられておりました。理性によって、欲求や欲望や感情というものを支配・制御して、感情に振り回されない、欲望に振り回されないような生き方をすることが、人間として立派なんだと考えられてきたわけですね。でも、これからはそれが逆転する、理性と感性の価値が逆転する。もちろん、理性も大事なんだ、それよりも大事なのは感性なんだ、心なんだという人間感にこれから変わっていかなければならない。我々が私・自分と言っているものは、欲求であり、本音であり、実感である。我々は理性を手段能力に使って、欲求を実現し、本音と実感と心と感性を成長させる。そういう理性の使い方を覚えていかなければならない。そのことによって、人間性は成長するのである。理性を成長させることによって人間性は成長するのではなくて、心・本音と実感を成長させることによって人間性は成長する、その新しい考え方をもって我々は活動しなければならない。**

**学校教育においても今日は全世界を考えても、理性を成長させるための教科書はあるけども、心を成長させる、人間性を成長させるための教科書が全く世界には存在しません、日本にも存在しません。だけども、これからの教育は頭のいい人間をつくることも大事なんだけど、それよりもっと人間性において優れた人間をつくること。人間らしい人間をつくるということに、本当の教育の目的をちゃんと据えなければなりません。そのためにはやはり人間性とはなんなのか。人格とはなんなのか。心を成長させるとはどういうことをすることなのか。人格を磨くとはどういうことなのか、ということがちゃんと書いてある教科書をつくって、その教科書をちゃんと小学校から皆が学ぶという状況をつくっていかなければ、我々は新しい時代、理性に代わる新しい時代というのをつくっていく活動に入っていくことはできないと思います。とにかく、我々は理性の支配から脱却して、西洋文明を超えて、より高度な新しい文明をつくっていかなければならないと**

**いう時期に今あるわけです。そういう西洋人的な考え方、西洋の考え方というものを超えていこうと思ったら、まず自分自身を理性の支配から抜け出させなければならない。自分自身を理性の支配から救い出さなければならない。そのためにも我々は感性を原理にした生き方というものがどういうものかをちゃんと身につけていく必要があります。**

**では、感性とはなんなのかということを考えていきますと、感性論哲学では感性は人間の本質であり、生命の本質であり、宇宙の究極的実在であるという考え方をしているわけですね。どうしてそういうことが言えるのか、ということなんですけど、感性が人間の本質であるというのはどういうことなのか。先ほども申し上げたように、感性から出てくる本音と実感、欲求というものこそ「私」であって、理性的になればなるほど個性がなくなる、また人間は自分から遠ざかるんですね。そういうところからも、我々が「私」と言っているもの=人間の本質は、理性ではなくて感性だと。理性は皆に共通するものをつくる能力ですから、理性は決して個性（=私）という原理ではありません。「私」の原理となるものは、本音であり実感であり欲求である。それこそ我々が「私」と言っているものの実態なんだ。本音と実感と欲求と言っているものを引っくるめて、感性だということなんですね。心も感性です。そういうところからも人間の感性だと、言わなければならないということもわかってくるわけなんですね。また、人間は理性・肉体・感性という三つの要素の有機的結合から命が成り立っているんですけども、その中で一体本当に自分というものの本質はなんなのかと考えると、肉体というものは新陳代謝によってすべて入れ替わってしまう物質なんですね。だから肉体を持って「私」だと考えているならば、新陳代謝で物質は入れ替わってしまいますから、新陳代謝によって何ヶ月ごとに全く違った自分になってしまうと。大体、新陳代謝は3ヶ月から3年ぐらいかけて、いろんなものは全部入れ替わってしまうという、そういうことになっています。物質の新陳代謝、物質交代といわれるものから、何年か経てば完全に違った物質が外から入ってきてるわけですから別人になってしまうと判断できる。そういう意味から、肉体を私という風に考えていたのならば、何年かごとに自分は別になってしまうと考えなければならない。**

**また、理性はどうかといったら、理性能力というのは生まれたときには存在しません。のちに理性能力がつくられてくるわけですね。理性能力というのは、人間が言葉を覚えて、言葉と言葉を結びつけていくことによって合理的に考えるという力ができてくるわけであります。後天的につくられてくる能力です。脳細胞があっても脳は肉体の一部分であって、脳は理性ではなく、精神ではない。理性という能力は言葉を結びつけることによって、後天的につくられてくる能力です。また人間は眠っているときには考えられません。だから、理性という能力は眠っているときには存在しない。脳は存在しても、考えるという機能は寝ているときには存在しない。また人間は歳を取れば痴呆状態になって、だんだんだんだん合理的に物事を考えるという力は弱っていってしまう。そういうことを考えてみると、理性能力というのは、我々が「私」と言っている、生まれてから死ぬまで変わらないものの実態を意味するものではない。理性は、生まれたときには存在しない、寝ているときには存在しない、そして、歳を取るに従って痴呆状態になり、衰退していくもの。**

**では感性はどうか。感性というのは、体内におらします頃から感じるというものは働いているわけであります。そして人間が死ぬまで働いている。寝ていても夢を見るということもありますから、寝ていても感性は働いている。感性は命をちゃんと健康に維持するための働きを命の中に持っているから、寝ていても死なないということなんですね。それがホメオスタシスといって、生命維持機能というものが感性によってなされているんだということであります。人間が最終的に死**

**んだかどうかは心臓が止まっても、呼吸が止まっても死んだと言ってはいかんと。その状態になっている人のまぶたを開いてペンライトを当てて、瞳孔を確認した際にちょっとでも動くのなら、まだ生き返るかもしれないということで、電気ショックを与えたり心臓マッサージをしたりなどの蘇生術を図る。そういうことから考えると、感性というものは母親の体内にいる頃から働いていて、死んだかどうかの最終的な判断も感性であると言える。感性こそ、人間が生まれてから死ぬまで働き続ける唯一の存在だと言うことができる。**

**その意味でも、我々が「私」と言っているものの本体、我々が「私」と言っているものを根拠づけるものは感性しかないという風に言うことができるわけであります。そう考えると、人間の本質は感性だという風に言わなければならない、ということがだんだんと明確になってきます。また生命の本質は感性だ、というのもどういうことなのかということなんですけど、これは今、死とは何かということで、人間が死んだということは、感性の働きが全くなくなった状態で初めて、死というものが宣言されるということをお話ししました。そういうところからも感性が生命の本質なんだと、感性によって命は生かされてるんだということがわかるわけです。**

**大事なことは、感性という働きは、単細胞生物でも持っているのであって、いわゆる脳生理学者や解剖学者が言うように、感性という働きは神経系に依存しているんだというようなものではないということなんですね。脳がなければ感性はないんだ、という有物論的な生命観というものを持ってはならない。単細胞生物でも感性、感じる力はあるということは、神経の存在がなくても感性は存在するということなんですね。そういう意味では、感性というのは神経系の存在に依存しない、独立した能力の存在なんだと考えなければならない。そして、命が生きていくためには感性が働いていなければならない。そう考えると、感性というのは確かに生命を支えている、生命の働きを成り立たせている。そういう根源的な存在、生命の本質という風に言うことができるということになるわけですね。これまでは、感性というのはほとんど神経の存在がなかったら感性はないんだ、という考え方で理解しておりました。感性は神経系の存在に依存する、そういう考え方をしておりました。だけども、感性というものを研究していくと、感性は単細胞生物でも感性を持っているんだから、感性は神経の存在に依存しない独立した存在なんだということがわかってくる。では、感性は一体どこから命に備わったのか。感性をつくったのは宇宙の摂理の力ですから、だから実は感性というのは、宇宙の中に元から存在したものであって、宇宙は命というものをつくったときに生きる力として感性というものを与えた。感性、元は宇宙にあったと理解しなければならない。**

**では、感性とは宇宙の究極原理だとは、どういうことなのかということなんですけど、感性という働きを研究していくと、感性というのは多くの人が感受性と言ってらっしゃることが多いんですけど、感受性とは受動的な能力であって、刺激があってその刺激に受動的に反応するというのが感性の働きだと思ってらっしゃる方が多いんですけど、だけども実際、感性というものを深く研究していくと、感性というのは自ら感じようとしている、そういうことがわかってくるわけであります。つたの類、朝顔とかそういう種の活動を見ていますと、ツルの先端を伸ばしていって、ツルの先端を振り回しながら自分の体を支えるものを探し求めて、その何かに当たったらそれに絡みついて伸びていく、という活動が感性の働きとして植物に見られます。そういうところから、感性というのは自ら積極的に感じようとしているものだということがわかってくるわけであります。感性は自分が生きようとする、生きるために必要なものを自ら探して求めてる働きが感性なんだ**

**ということがわかってくる。これが感受性ではなくて求感性、求めて感じる性質。そういう能動的に積極的に感じようとしているものが、感性の本当の働きなんだ。これが生命の本質として存在する。だから我々は、自分の心を本当に満たすものを自ら探し求めるという活動をするんだ、ということになってくるわけですね。感性の本質は感受性じゃない、求感性だ。感受性も間違いではないんですが、感受性を成長させようと思ったら、求感性を高めなければならない。自ら求めて感じようとするという力を成長させていくと、感じ取る力も成長していくんだと。そういう関係性にあるわけであります。能動的な働きが感性の本質なんだという風に言うことができます。皆、本当は自分が命を燃やして生きることができるものを求めている、と言えます。その求感性が命に宿ることによって、人間は生きたい・生きようとする気持ちを本質において持つと、それが命というものの本当の姿だということです。**

**どのようにして感性は自分の心を満たすものを求めるという働きをするのか。この働きを分析すると三つの作用が根底にあるということがわかってきます。人間の命の中で働いている感性の働きをホメオスタシスといって、生命維持機能を果たしています。これを日本語に訳すと、平衡作用。それは三つの作用が複合して成り立っているということがわかるんです。調和作用と合理作用と統合作用の三つが根底にあって、ホメオスタシスは成り立っているということがわかってきます。これがわかることによって、感性が宇宙に存在して、宇宙から命が感性に与えられたものだと根拠づけられることになります。**

**それは、宇宙には法則があると我々は考えています。宇宙法則というのは、右辺と左辺がイコールで結ばれるという形で表現されます。基本的に宇宙法則というのは、宇宙の秩序というものをバランスのとれたものとして、合理的に表現したものだということができるということなんです。感性が持っている調和作用と合理作用と統合作用という、命の中で働いている感性の働きと同じものが実は宇宙にもあって、調和作用と合理作用と統合作用の三つの働きが宇宙の秩序をつくって、宇宙の存在を支えているんだということがわかってくる。そのことによって、感性は宇宙にあって、そして宇宙も感性によって生かされ支えられて存在しているんだということができる。そういうところから、宇宙の究極原理は感性だということができるということなんですね。**

**感性はただ感じるという能力ということだけではなくて、感性の感じる力が、実は宇宙の究極的な実在、存在するという考え方をしなければならない。感性というのは、物質と同じように宇宙に存在するんだと。そういう考え方をすることが感性論哲学を理解するため非常に大事であります。ただ感じるだけではなくて、感性が存在するんだ。感性という感じる力が存在するんだ。その存在が命に宿って、命を生かす、命を支える感性の働きとして、生命の本質となっているんだ。その存在としての感性が人間の本質でもあって、我々が私・俺・自分と言っているものなんだ。「私」という存在は、感性という存在によって支えられているんだ。感性が存在であるがゆえに、「私」は感性だと言えるんだ、とそういうことになってくるわけであります。そのようにして、感性論哲学は人間の本質も生命の本質も宇宙の究極的実在も、存在としての感性によって貫かれているという考え方をするわけです。**

**今日までの哲学史、西洋の哲学史の中には、感性というものが存在するという、感性がものと同じように存在するんだという、感性の理解が全くなかったんですね。感性というのは、ただ感じる機能であって、感性という感じる力が存在するという考え方が全くなかった。だけども、これからは**

**アジアが世界の舞台となって、中心となって、感性を権利にしてアジアの文明は発展していくということを考えれば、これからの未来の時代をつくっていく原理として、存在する感性、存在としての感性というものが、非常に大事な意味を持ってくる。西洋人は理性は存在すると考えてきたんですけど、理性能力というのは機能であって、存在するものではない。本当に存在するものは感性だけだというのが、感性論哲学の考え方であります。**

**…ちょっと学問的な込み入った話になって、なかなか理解しづらいところがあると思うんですけども…。一応、感性というものは世界の究極的な存在であって、感性が命の本質となって支え、また感性が人間の本質として自分の存在を支えてくれている…そういう体系を持ったものが感性論哲学であります。こういう考え方は今日まで世界になかった全く新しい考え方であり、哲学なんだということをまずご理解いただきたいと思います。これで一応1時間半経ちましたので休憩に入ります。どうもありがとうございました。**

**それでは、後半の話に入りたいと思います。**

**我々は西洋中心の時代からアジア中心の時代へと文明は変わっていくという状況の中で、新しい時代を生きようとすれば、まずとにかくは西洋的な理性の支配からどう脱却するかということを考えないと、理性的ではない新しい文明というものをつくっていくことができません。まず理性とはなんなのかということを改めて考えてみる必要があります。ということで今は理性の揺らぎ、本当にこれからも理性を信じて生きていってもいいのかという反省が出てきている状況ですので、理性のどこに問題点があるのかということを考えていく必要があるわけであります。**

**理性批判というのは、西洋においては19世紀の中頃から実存哲学というものが出てきて、実存哲学という考え方の中、理性批判というものはいろいろ展開されました。理屈を超える物事の考え方というものとして、19世紀においてはセーレン・キルケゴールあるいはフリードリッヒ・ニーチェという方々が実存哲学というものをつくり出した人物なんですけど、彼らを中心にして理性批判が展開されて、合理的にのみ物事を考えていくということの間違い、危険性のようなものが指摘されたわけであります。20世紀になってからはカール・ヤスパース、マルティン・ハイデッガー、ジャン=ポール・サルトルという大哲学者がそろって、理性批判という立場で理性の限界というものを考えさせるような思想を展開しました。**

**だけど実存哲学というのは具体的に理性を批判するということはしたんですけど、理性に代わる新しい原理を提案するということまではいかなくって、ただ理性批判という段階で終わってしまった。それがために今日においては、全く実存哲学は力をなくしてしまって、そしてあまり重要視されないような状況に至っております。実存哲学の活動の中で影響を受けた、先ほど申し上げたジークムント・フロイトが、理性による人間への支配、抑圧、冷静による本能への支配、抑圧というものが、人間性を破壊して精神の病をつくり、またさまざまな内臓の病気をつくり出すという考え方の基本を示しました。そういうところにおいても、理性というものがいかに人間の命にとって危険な働きをするかということがわかってきて、理性の支配から本能を解放するということが病気を治すために必要だと説いたわけであります。こういうところからもやはり、理性能力の限界、間違った働き方というものが、考えられるようになってきました。**

**それから1931年には、クルト・ゲーデルという数学者が、理性の不完全性定理という論文を書い**

**た。理性というのは、原理的にいって不完全だという考え方を論文に書きました。彼は数学者なんですけども、実際の論文は記号論理学という論理実証主義というものを展開して書かれた論文なんですけども、とにかく理性というものが不完全だということを論理的に証明する論文が、1931年に提出されました。非常に大きな価値ある論文で、理性が不完全だということなってしまえば、理性を原理にして、理性を使って学問をするということが、無意味になってくるようなこともあったりなんかしますので、大きなショックを与えた論文であります。だけどもで、不完全性ということは論文として存在するんですけど、あまりそのことを多くの学者は取り上げないで、今でもやはり理性を信じて、理性を原理にして、いろんなことを研究するということがなされているわけですので、まだまだその意味では人類は理性の支配から脱却していない。まだまだ理性の奴隷という在り方に逡巡していると言って過言ではありません。**

**さらには1950年前後に、フランスの有名な哲学者であったアンリ・ベルクソンが「時間と自由」という本の中で、「理性という能力は生きているものを殺す力だ」と、非常に激しい理性批判を展開しました。これはどういうことなのかと言ったら、理性によって認識されたものは変化しなくなってしまう、変化しないということは死んでいるんだ。だから、理性というのはあらゆるものから命を奪うという働きをしていると、本の中で強調しました。だんだんだんだんと、理性に対する盲信や絶対的確信というものが、理性批判などの考え方が出てくることによって、少しずつ人類は目覚め始めるという状況になってきてるんですね。本格的に理性の支配から脱却して、感性を原理にした新しい文明をつくっていこうと思ったならば、もっともっと我々ははっきりと理性という原理から脱却する、理性的に考えるという考え方から決別するということが求められてくるわけです。そうでなければ、新しい文明というものをつくり出す力というものが出てきません。そこでもう一度原点に返って考え直してみると、いわゆる西洋の方々が信奉し、信じている理性とは一体どういうものなのか。**

**感性論哲学では、理性能力というのは合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力であると規定しています。でも、西洋の方は合理的に考えることができる素晴らしい能力なんだ、という肯定的な理解の仕方をして、理性を使っているんですけど、そういう考え方を踏襲している限り、我々はこれによってつくられたものを超えた、もっと素晴らしい文明をつくるという活動に入っていけません。そういう意味で、理性能力というのはどういう問題を持っているかを知る必要があります。**

**まずは、理性というものがどのようにしてできてくるかということなんですが、生まれたときには140億個という脳細胞がすでにあるんですけど、考えることはできません。脳は肉体の一部分であって、精神でも理性でもありません。脳という肉体が考えるという力を持つためには、どういう手順が必要かというと、脳細胞が人間がつくった言葉を覚えることをしないとダメなんです。人間がつくった言葉と言葉とを事実に合わせて結びつけていく作業をすると、合理的に考えるという力が出てくる。これが理性なんですね。理性能力というのは言葉の存在を前提とします。ということで、理性能力というものは、言葉が持つ限界を背負っているんだと言うことができる。言葉の持つ限界とはなんなのかと言えば、言葉によっては表現し尽くせないものがある。言葉の表現からはこぼれ落ちてしまうものがある。言葉によって表現し得ないものを実態と言うんですけど、実態は表現ではすくいきれない、言葉では表現し尽くしきれない。言葉というのは抽象概念ですよね。抽象概念ということは、現実には存在しないものなんですね。現実に存在するものは、梅の**

**木、松の木、桜の木というのはあるんだけど、それを全部ひっくるめて「木」だと言う言葉をつくるわけです。「木」というのは、現実には存在しない。あるのは一つひとつのそれぞれの木だけ。総称することは、つまり抽象化するということ。抽象概念をつくる、言葉というのは、すべて現実から遠ざかる、本当の実態から遠ざかるという形のものが抽象概念、言葉であります。そういう意味では、言葉というものによって物事の実態は掴めないというのが、基本的な言葉と現実（存在）との関係性であると言えます。**

**そういうことで、座禅とか瞑想という世界でも、本当の物事の実態というものに触れるためには、「まず考えないで黙って座っておけ」というのが「」といって、物事の実態と触れる原理なんですね。多くの場合、仏教では「考えないで肉体を動かして行動する。そうして掴んだ感性の実感・悟りとして表現する。そのことによって物事の実態に触れるという体験を持つことになるわけであります。そういう意味でも、物事の実態というのは言葉では表現できない。体を動かして直に触れる、体験することで物事の本当の実態がわかるんだというのが、仏教における悟りの境地であります。実際問題、水は冷たいんだということを知識として知っていても、本当に水が冷たいということを実態・実感として感じるためには、水の中に自分の手を突っ込むことをしないと、「冷たい」とは言えないわけですよね。だから、水は冷たいんだという言葉による認識というのは抽象概念であって、本当に水が冷たいということの実態を知る・実態を感じる・実態を掴むためには、水の中に手を突っ込むという行動が、どうしても求められてくるわけですね。そのことによって、我々は物事の実態・本当の姿に触れる、本当のことを知ることになります。そういう意味においても理性能力というのは、実態から遠ざかった抽象概念である言葉というものを結びつけて考える能力ですから、そういう意味で実態を表現できない、また理性能力は言葉による限界を背負っている。言葉というものは表現し尽くし得ないものがある。理性能力というのは、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だという認識を我々は持つことができることになるわけであります。**

**合理的にしか考えることができないということが、どうして不完全ということになるのか。人間というのは、理性・感性・肉体という三つの要素からできており、三つの要素が有機的に絡み合って、人間という命をつくっている。人間というものに対して、これまでは理性だけで対応して、いろんなことを考えて色んな判断をしてきた。ということは、命というものを合理的に認識するということ。それは実は、命というものを合理的に歪めているという結果になってしまっている。理性的に考えることは、理性的に歪めてしまうことになるんだ。そこに理性の不完全性、有限性、限界があるんだと知る必要があります。理性では物事の実態、生きた姿、実態を掴むことはできない。理性は抽象的にしか理解できないという限界があると言えます。**

**これらは、理性に対するマイナスの評価なんですね。どんなものにもマイナス面、プラス面はあります。では、理性の積極的なプラスの価値はどこにあるのか。それは、理性は嘘を言える、というところにプラスの価値があります。理性は事実に合った本当の事も言えるし、事実にはない嘘も言える、ということが、理性能力の二面性であります。嘘が言えるということは、事実に支配されない・拘束されていない面が半分はあるんだと。それによって未だ事実になっていない、事実には現在と過去しかないから、嘘を言えることにより、理性は未来に対応できる。未来とは、人間にと**

**っての夢であり、理想であり、目標である。理想とは、絶対にこうだということではなくて、今よりもより良いこと、というものを指します。そういう意味では、理性とは絶対にこうだと言うことはできないが、今よりも素晴らしいことを考えることができる。そこに理性の積極的な価値がある。理性能力というのは絶対こうだということを言ってはならない。今よりも素晴らしいことを考える、そこに積極的な価値があるということなんですね。**

**それにより理性能力の本質がわかってくるとどうなるかと言ったら、とにかく理性は絶対こうだとは言えない、理性で考えたことは全部偏見なんだということを我々は忘れてはなりません。理性で考えたことは全部偏見なんだと。どんな立派な人間でも自分の肉体のある場所からしか見えないし、どんな立派な人間でも今自分の肉体のある場所でしか判断できない、考えられない。だから肉体を持っている限り、人間の考えは全て偏見で、偏りがある。偏見というのは間違った考えではなくて、正しいんですよ。正しいんだけど、その正しさには偏り・歪みがあることを偏見と言うんです。偏見は間違っていない、その人の立場から見たらこう見えるということは、それなりに正しいんですよね。だけどその人の立場から見たら、こういう風に考えられるというのは、その人の立場に偏った考え方ですから、それを偏見と言うんです。**

**そういう意味では、これから我々が理性で考えて結論を出した場合、自分の考えはどんなに正しいと思っても、それは偏見なんだ、偏りがあるんだ、歪みがあるんだということをちゃんと自覚する必要があります。自分の考えは偏見なんだから、その歪みや偏りを正そうと思ったならば、自分と違った考え方を参考にして、自分の考え方の歪みを修正しよう、偏りを修正しようという気持ちにならなければならない。そのことによって我々は理性的な傲慢さから脱却して、謙虚に理性を使って、そして自分と違った考え方の人ともちゃんと協力し合いながら、お互いに正しい考え方に近づいていくという生き方ができるようになる。理性の限界を知るということはどういうことなのか。自分の考えがどんな正しいと思ってもそれは偏見なんだ。偏りがあるんだから、必ず自分と違った考え方にも耳を傾けて、そして自分と違った考え方であったならば、その自分と違った考え方を参考にして、自分の考え方の歪みを訂正しようという気持ちで我々は理性を使わなければならない。これが理性は有限であり、不完全だということになるわけであります。**

**現実的には、自分が正しいと思ったことをどこまでも主張して、そして自分と違った考え方を敵にまわして、勝ち負けを争うという状況が見られます。自分の考え方が正しいと思うと、自分の考えで相手を説得して、そして相手の考えの間違いを指摘して、相手を自分と同じ考え方に導こうとするような理性の使い方をしてしまっている。というのが、今日までの西洋的な理性の使い方でした。だから、西洋の方々は自己主張が強い。考え方において負けることを「恥」と考える。これは有名な哲学の祖といわれるソクラテスの論理展開にも見られるわけであります。ソクラテスという人物は、西洋において最高に尊敬されている哲学者の典型と言うことができる人物ですけども、ソクラテスがやった活動というのは、実は民衆の前で有名な人と対談・対話をして、そして議論をして相手を言い負かすという説得論理を展開しました。結果としてソクラテスは多くの人から嫌われて、人民裁判にかけられてしまって、その裁判で死刑を言い渡され、牢獄に放り込まれた。そして、牢獄の中で自ら毒杯を仰いで死ぬという結末に至った。それがソクラテスの人生の終末の姿でした。一体なんで哲学者として尊敬されているソクラテスが人民から嫌われ死刑を宣告され、牢獄の中で死ぬという結末に至ってしまったのか。ここに理性的な世界である西洋というものを超えて、我々は理性を超えた新しい時代をつくっていかなければならない大きな根拠にな**

**るものが、含まれているわけであります。**

**これはどういうことなのかと言ったら、ソクラテスは本当の真なる知識に到達するためには、今自分の持っている知識というものが間違っているんだということをちゃんと知らないと、本当の知を求めていくということはできないと考えて、多くの人に無知の知を自覚させるという活動をしました。無知の知=自分がいかに本当の知から遠ざかって、勝手な主観的な知識しか持っていないかということを多くの人に分からせて、本当の知という真理に皆を導いていこうという無知の知を知らせしました。これをまた違った言葉で言うと、「汝自身を知れ」。いかに自分自身が本当のことを知らないか。本当の自分自身を知る。それで多くの有名な人と対談をして、市民が取り巻く広場で行う。その中で相手の無知を暴くということをしました。結果として、そのことによって相手はソクラテスを恨むんですね。多くの人の前で赤っ恥をかかされて、自分の権威に傷をつけられて、ソクラテスの人間性は悪いとして、ソクラテスを批判する。あのような人間をのさばらせてはいけないということで、彼の行いを裁判所に訴える。また市民は、ソクラテスは誰と対話をしても勝ってしまう、ああいう先生のところに自分の子どもを通わせ、教えてもらえれば、誰と対話をしても必ず相手を論破して、そして論争に勝つ、優れた人間になるんじゃないかと思って、多くの市民がソクラテス学校に自分の子どもをやって、ソクラテスの教えを請うということをしたんです。だけど、その子ども達が休みになって家に帰ってくると、「そもそもお父さんは何が善かということがわかっておっしゃっているんですか」と言って、ついついいつも親の言うことに反論して、そして親の無知を暴こうとするように。結局、お父さんお母さんも学校にやると息子が悪い子になってしまうと思い、裁判所に訴えることにしました。結果として、裁判所もあまりにも訴状がたくさんたまったものですから、裁判を開かざるを得なくなってしまって、ソクラテス裁判というのを開くんです。結果として市民の多数が、ソクラテスが悪いということになり、死刑を言い渡され、牢獄に放り込まれるようになってしまったんですね。**

**経緯を考えてみると、ソクラテスは理性的に正しさを追求するあまり、そういうことをした時に相手がどういう辱めを受けるか、またどんなに傷つくかという人間の心とか気持ちというものを考えないで、ただ理性的な活動一点張りでやってしまった。結果として、理性的には相手を言い負かしたけど、感性、心、信条においては恨まれるという結果になってしまったということです。こういうことからも、いかに人間の心、感情、気持ちが大切であるか、いかに人間にとって大事なのかということを我々は知ることができるし、学ばなければなりません。理性的になることによって、相手に対する思いやりや温かな心をなくしてしまって、そして正しいか間違っているかということだけで世間を生きてしまう、そのことによって多くの人から嫌な奴だと思われるということになってしまう。人間にとってもっと大切なことは、相手の気持ちを考える、相手の心を考える、思いやりが人間にとってもっと大事なことなんじゃないかということです。だけど、西洋人は心とか気持ち、心情を理性よりも下等なものだと考えておりましたので、ソクラテスは多くの人に嫌われても最後まで死を恐れずに正しさを貫いた立派な人物だと尊敬されているわけであります。西洋人にとっては、正義、正しさを貫くことが、人の心を考えるよりも大事なことだと思われている。理性優先というか、理性を第一義に、心とか心情を第二義的な、そう重要ではないと考えるような風潮が西洋にはあります。だけども、ようやく理性の時代が終わって、我々は理性を原理にして生きるところから、新しい生き方を求めていかなければならない時代に入りました。ここで我々がもう一度思い出さなければならないのは、ソクラテスの心情、心を無視した理性一点張りの活動の恐ろしさというものであります。**

**そういうことを考えても我々は、早く自分自身を理性的な生き方から解き放ち、そして心、感性、心情というものをもっともっと大事にする生き方を自分自身にも取り戻して、またその生き方を全世界に教えていくということをしなければならない。正しさを追求するよりももっと大事なことは、人間の心を大事にすることだと、そういう人間観を我々日本人は、世界に教えていくという使命を持っているのではないかという風に思われます。**

**やはり現実を考えれば、我々は理性的に生きている状況がまだまだ根強くあって、考え方が違ったら相手は自分の敵だとなってしまったり、価値観の違う人とは一緒に仕事ができないようになってしまったり、感じ方が違ったら一緒に生活できないということになってしまったり、宗教や民族の違いで戦争をして殺し合うという状況が、ずっと続いている。これが今の人類の現状であります。このことをもっともっとよくよく考えてみる必要があります。相手は自分と同じように考えてくれないとやっていけない、相手が自分と同じ価値観を持ってくれないと一緒にやっていけない、という人はどういう人なのか。相手が自分と同じように考えてくれないとやっていけないという人は、自分しか愛せない人間だ。自分しか愛せないような愛は、偽物の愛だ。自分しか愛せない愛でどうして子孫が残せようか。愛は本来、男が女を愛し、女が男を愛する、そういう種族保存の欲求から愛は生まれてきたものであります。そういう意味で、我々が今人間関係の原理として持っている、同じ考え方・価値観の人と生きていくという理性的な考え方というものは、実は理性によって歪められた間違った人間観なんだと、はっきりと自覚する必要があります。今人類は、理性的になることによって、考え方の違う人とは一緒にやっていけないという心情になってしまって、考え方が違うことによって離婚が増えてくる。考え方の違いで敵対をする。また自分の子どもが自分の言うことを聞かないとムカついて、そして躾のつもりがついつい虐待になってしまう。そういうことが多々起こっているわけであります。これはやはり、理性の奴隷と化した人間の悲しい姿ですね。考え方が違ったら一緒にはやっていけない、まさに理性の奴隷であります。どのようにして我々は奴隷と化した自分を理性の支配から救い出して、そして理性能力というものを人間が生きる手段能力として使って、人間が理性を支配して、人間が理性を使いこなして、そして自分らしい生き方をするために理性をどう使いこなしていくかを考えていかなければなりません。**

**そこでまずわかっておいてもらいたいことは、考え方が一緒でないとやっていけない、相手が自分と同じように考えてくれないとやっていけないということは、実は自分しか愛せない人間なんだ。自分しか愛せないような偽物の愛だ。自分しか愛せないような愛でどうして子孫が残せようか。本来愛というのは男が女を、女が男を愛す。互いに異なるものが求め合って、共に生きる。そこに愛の基本原理があるんだということを我々は忘れてはならない。今求められている人生を生きる力は、理性ではない愛だ。愛とは何か。それは考え方と共に生きる力だ。考え方が違う人と共に生きる力だ。我々は今理性を超えて新しい原理に基づいて人生を生きる力を持つことを要求されている。それは考え方の違う人と共に生きるということを望まれている。価値観の違う人と共に仕事をすることを望まれているんだ。宗教の違う人と共に生きることを期待されているんだ。考え方の違う人と共に生きることを矛盾を生きると言います。離婚の激増を食い止めようと思ったら、幼児への虐待を防ごうと思ったら、考え方の違う人とも共に力を合わせて助け合って生きるという力を我々は獲得していかなけれならない。それができなかったら、家庭の平和も組織の平和も世界の平和もあり得ない。今我々は理屈で正しいか間違っているかという判断で生きるんではなくて、考え方の違う人とも共に力を合わせて生きることが望まれている。すなわち、理屈を**

**超えた生き方が今人類に求められている。それが今の人類の置かれている状況だということですね。理性能力というのは、矛盾を排除するし、理性は画一性を追求する。真理は一つと考える。理性能力では、考え方の違う人とは一緒にやっていけません。これが、近代の時代への、理性の時代への限界なんです。理性の限界を突破して、西洋人がつくった科学技術文明よりももっと素晴らしい文明をつくっていこうと思ったら、何が人類に期待されているのか。考え方の違う人とも共に生きる力だ。価値観の違う人とも共に仕事をする力だ。宗教の違う人と共に協力して生きる力だ。これが理屈を超える力だ。理性ではそれはできない。**

**ということは、今我々に求められている力は、矛盾を生きる力だ。この矛盾を生きる力を愛というんですよ。愛は理屈を超える力、理性を超える力だ。今我々に必要なのは、愛の力を成長させなければならない。なぜ愛が必要なのか。今我々の生きている社会の現実というのは、性格の違う人がいる、考え方の違う人がいる、価値観の違う人がいる、宗教の違う人がいる。我々はそういう社会の中で生きる力が求められている。そういう社会の中で生きる力を社会性というんですね。性格の違う人がいる、考え方の違う人がいる、価値観の違う人がいる、宗教の違う人がいる、だから異なれば共に仕事ができないというのは、社会性がないということになる。社会の中で生きていこうと思ったら、どうしても社会性が必要なんだ。考え方の違う人とも共に生きる力が社会においては必要なんだ。**

**なぜ社会において社会性が求められるのか。それは人間の命の根源から湧いてくる欲求は、できることなら皆と仲良くしたいというのが命の叫びなんですよ。欲求なんですよ。できることなら皆と仲良く、信じ合ってやっていきたい。これはどこから出てくるものなのか。なぜ、命の根源から湧いてくるのか。これは、命をつくった母なる宇宙の願いなんだ。母なれば、自分の産んだ子どもたちが皆仲良くしてくれることを願うはずなんだから、自分の産んだ子どもたちが喧嘩したり、対立したり、殺し合ったり、憎しみ合っているのは、本当に悲しいし、情けないし、泣きたくなるような現実なんだ。我々の命の根源から湧いてくる、できることなら皆と仲良くしていたいというのは、命をつくった母なる宇宙の願いであり、祈りであり、思いなんだ。命は母なる宇宙がつくったものだから、本当に我々が人間らしく、命を有り難いものだと思って生きていこうと思ったら、母なる宇宙の願いであり、祈りであり、思いを実現する生き方をしないと。そこにしか人間らしく生きる生き方はない。**

**残念ながら理性では、考え方の違う人とは生きていけない。これまでは理性を原理にして西洋文明はつくられてきた。だけど今、西洋の文明は自然破壊、環境破壊、人間性の破壊という問題にぶつかって、行き詰まっている。この問題を乗り越えていこうと思ったら、理性を超える、新しい生き方を原理にして持たなければならない。その原理が、矛盾を生きる愛の力だ。性格の違い、考え方の違い、価値観の違い、宗教の違いなどの異なる人とは一緒にやっていけないというのは、愛が存在していません。どうしたら仲良くやっていけるかどうかというところに、愛が生まれてくるわけであります。これから我々は、理性でつくられた西洋の文明を超えて、矛盾を生きる、愛を原理にした新しい世界をつくっていかなければならない。そして西洋人をも対立や戦争というものから救って、全人類がお互いに違いながらも力を合わせて、共にやりがいを感じて生きていくことができる世界をつくっていく必要があります。**

**残念ながら西洋人がつくった近代の民主主義社会というのは、権利を主張し合って、皆が対立をして責め合う構造を持っています。この民主主義社会、近代社会というものを早く超えていかな**

**いと、平和な時代はやってきません。民主主義社会と言うと良い社会のように思われてるんですけど、民主社会の実態は権利を主張し合う社会なんですよ。民主主義というのは基本的人権という権利を表に掲げて成り立っている社会ですので、民主主義社会というのは義務を果たさなくても権利はあるという人間観に立っています。だから、民主主義の人というのは、権利を主張するけども義務はできるだけ果たさない努力をするんですよ。税金というのは本来、国民が国を支えるために皆で拠出しなければならないお金なんですけど、全国民が皆節税をする。できるだけ義務を果たさないように、できるだけ税金を少なくしようとする。あまりにもその節税が行き過ぎてしまって、脱税になってしまう。民主主義社会というのは、権利を主張する人だけが得をして、権利を主張しない人は損をする。文句を言えば何かしらの金になる、何もしなければ一銭にもならんという歪んだ社会が民主主義社会です。明らかに社会の在り方として歪んだ、問題があると言わなければならない。基本的に皆権利を主張するのが当然のようになっていますから。**

**民主主義社会の政治は、与党野党が責め合う。裁判は検事と弁護士が責め合う。経済社会は経営者と社員が責め合う。夫婦は夫と妻が責め合う。責め合うことをしないといろんなことが動いていかない、それが民主主義社会の実態であります。不完全である人間がお互いに権利を主張し合ってお互いを責めることをすれば、本当にこの世は生きるに耐えない地獄となってしまう。我々が本当に求めていかなければならない社会は、責め合うのではなく、許し合って生きていくという愛に基づく社会でなければなりません。本当に不完全な人間が安心して生きていく社会をつくろうと思ったら、不完全であることを責め合うのではなくて、不完全であることを許し合って、助け合って、協力し合って、共に生きるという心を基本に据えた社会をつくっていかなければならない。これが愛に基づく社会の姿であります。早く我々は西洋的な社会の在り方から脱却して、不完全であることを許し合って生きる、愛を原理にした社会をつくっていかなければならない。これも時代をつくる役割を持っている哲学というものの大きな使命であります。**

**理性的な社会から脱却して、近代社会から脱却して、新しい愛に基づく社会をつくっていこうと思ったら、我々は愛というものをいつまでも情緒・感情・本能・情熱という風な自然発生的な状況のままで放置するのではなくて、愛というものを能力と考えて、愛の能力を成長させるという新しい発想を持つ必要があります。愛の能力が成長しないと、考え方の違う人と共に生きる力というのも出てきません。考え方の違う人と共に生きることは愛の力によってなされるものであるとするならば、愛というものを能力として成長させ、どうしたら考え方の違う人と共に生きることができるのか、ということを考えていかなければなりません。まだまだ愛というものを理性と同じように能力だと考えている人がいない。愛というものを能力として成長させ、社会を生きる実力として愛を育んでいく。**

**人間は文化をつくる動物と呼ばれていますが、まだ愛は文化になっていない。早く愛を文化たらしめなければならない。人間は自然のまま生きることができない、自然に手を加えて、自然を文化たらしめて、自分自身がつくった文化・文明・歴史の中で生きるというのが、人間として生きる環境であります。でも、まだ愛は文化になっていない。だから、我々はまだ愛に悩む、苦しむという状況にある。では、どうすれば悩み苦しむという状況から自分自身を救い出すことができるのか。愛というものをいつまでも情緒・感情・本能・情熱という風な自然発生的な状況のままで放置するのではなくて、愛を文化たらしめて、愛を人生を生きる力に変えていく。そのためには、愛を能力として成長させなければなりません。そのためには、愛を学問的に研究することが大事である。ま**

**だ愛は学問の対象になったことがない。愛はもっぱら文学のテーマであって、文学の中ではさまざまなバリエーションが描きつくされてきた。それが小説の中で語られれば語られるほど、ますます人類は愛に迷うことになる。さまざまな愛の形があるほど、自分の愛の形が定まらない。そういう愛に悩むという状況から人類を救おうと思ったら、いつまでも愛を文学のテーマとしてバリエーションを描く次元から解放して、愛の本質と理念を知るという状況に持っていかないと、愛を人生を生きる力に持っていくことはできません。これから我々は愛を学問的に研究していって、愛の本質と理念を理解して、明確にすることで愛を能力として捉えて、愛の実力をつくって、そして理性によって解決できない問題を愛によって解決していくことが、大事になってくるわけです。その結果として、考え方の違う人とも一緒にやっていける、価値観が違っても一緒に仕事できる、という力を人類はものにして、やがて離婚の激増をくい止め、幼児への虐待を防ぎ、そして宗教戦争・民族戦争をなくしていく。そういう力を人類は獲得していくことになるわけであります。**

**一体どうすれば考え方の違う人と共に生きることができるのか。そのことを考えるためには、同じ考え方の人とばかり付き合っておったら楽しいし、愉快で気楽だけど成長しない。人間は成長していこうと思ったならば、自分にないものを持っている人と付き合って、相手から学び取るということをしないと、人間は成長しない。これが教育、成長というものの基本原理であります。そういうことを考えたら、対立とは一体なんなのかと言ったら、対立というのは、自分にないものを相手が持っているから対立する。考え方の違いはどうして出てくるのか。違いが出てくる原因が五つあるんです。**

**それは体験が違うと考え方も違ってくる。経験が違うと考え方も違ってくる。知識情報が違うと考え方が違う。また物事の解釈が違うと考え方が違ってくる。また人生のさまざまな出会いが違うと考え方が違う。出会いとは、事件や災害、事故、特定の本・人間など。出会いの違いでも考え方が違ってくる。その原因は、体験と経験と知識情報と解釈と出会いの五つ。これらが人間のさまざまな違いをつくる原理であります。すなわち、考え方が違う、対立するとはどういうことなのか。それは相手が自分にはない何かを持っているということなんだ。そして人間が成長するために必要なことは、自分にないものを持っている人から、自分にないものを学び取るということが成長の基本的な原理である。**

**ということを考えたならば、考え方が違うということはどういうことなのか。考え方が違う、対立するとはどういうことなのか。対立とは、自分が成長するために学ばなければならないものを持っている人間が、今自分の目の前にいるんだということを教えてくれるもの。また、自分が学び取らなければならないものを持っている人間が誰かを教えてくれるもの。対立を体験することで初めて、「この人は俺にない何かを持っているんだな」ということがわかる。自分が学び取らなければならないものを持っている人間が誰かを教えてくれるものと解釈することで、自分が成長するために学ばなければならないものを持っている人間が、今自分の目の前にいるんだということを知ることができる。そういう気持ちになれば、相手を見る目が違ってくる。敵として見るのではなく、何かを教えてもらおうとする目に変わる。この目の変化が、人間関係の対立を乗り越えさせる強力な決め手になるわけですね。仲良くなるのも目、対立するのも目、問題を乗り越えるのも目、目ひとつであらゆる問題が解決すると言って過言ではない。**

**目ほど大事なものはない。人間関係を最終的に決めるものは目だ。「嫌なやつや」という目から、**

**「この人から何かを学ばなければならないな」という目に変わる。その目の変化が相手との対立の心情を乗り越えさせてくれる。目ほど大事なものはない。目は口ほどにものを言うと申しますけど、目は口ほどじゃない、口以上にものを言うんだ。口では誤魔化すことはできますけど、目は心の窓といって心がそのまま出てくる。ちょっとでも何かしら相手に対する反発的な気持ちを持っていたら、それがすぐ目に出てくる。それがすぐ相手に感じ取られてしまう。目を成長させようと思ったら、心を変えなければならない、意識を成長させなければならない。意識を成長させるとはどういうことなのか。対立しているということは、相手が自分にない何かを持っているんだ、だから自分が相手から何かを学び取らなければならないんだ、という意識になっていくと相手を見る目が違ってくる。そのことによって我々は、人間関係の問題から抜け出していく実力を自分のものにすることができることになるわけであります。**

**これから世界は戦争の時代から平和な時代へと大転換していかなければならない。だけど残念ながらまだまだ世界には戦争がたくさんある。どうしたら戦争を乗り越えた本当に平和な世界をつくっていく力というのを我々は持つことができるんだろう。オバマ大統領が世界平和のために核兵器の廃絶ということを叫ばれたわけですけど、核兵器がなくなっても戦争はありますよ。武器が全部なくなっても人間は憎しみ合えば何をやってでも殺してしまうんですよ。本当に我々が平和な家庭、平和な組織、平和な世界を望むならば、核兵器をなくすのではなくて、自分自身の心の中に平和の砦を築くことをしなければならない。これは第二次世界大戦が終わって、国連にUNESCOという機関ができて、それによって憲章ができたんですが、その書き出しの言葉に、本当に平和を実現するために何が必要なのか書いてあるんですよ。どういう言葉かといったら、「戦争は人間の心の中から始まるのである。だから人間の心の中に平和の砦を築かなければならない」。これがUNESCO憲章に書かれた文章の書き出しの言葉であります。これは本当にものすごく洗練された無駄のない見事な美しい言葉です。**

**だけど残念ながら、西洋の方々は権利を主張して対立するという状況から、なかなか脱却できないでいます。どうすれば一体、ひとりの人間の中に平和の砦を築けるのかをこれから考えていかなければならない。とにかく日本人は、和心・大和心という心を持っている唯一の民族であります。大きく和する心。これを持ってこれから世界に貢献しなければならない。その意味でも日本人こそ心の中につくらなければならない平和の砦とはなんなのかをよく考える必要があります。だけども、この素晴らしい「戦争は人間の心の中から始まる。だから人間の心の中に平和の砦を築かなければならない」という言葉は、残念ながら国連の事務総長は一回も言ったことがないんですよ。ノーベル平和賞をもらった学者も一回も言ったことがないんですよ。長崎市長も広島市長も一回も言ったことがないんですよ。沖縄でも一回も言われたことがないんですよ。あのケネディすら言わなかった。**

**なぜ、こんな凄い素晴らしい言葉を人類の指導者たるべき世界の有名な方々が口にしないのか。それは、平和の砦を自分の心の中につくっちゃったら、人を非難したり、対立したりすることができなくなってしまって、社会の機能が麻痺するからです。現実的に民主主義社会の政治は、与党野党が責め合うんですよ。そうでないと動かない政治は。裁判は検事と弁護士が責め合わないと機能しない。経済社会は経営者と社員が責め合わないとちょうど良い妥協点が出てこない。責め合うという構造で民主主義社会は成り立っている。ですから、心の中に平和の砦なんかつくってしまったら、民主主義社会そのものの構造が崩れてしまうんですよね。そういうことが原因かどう**

**か分かりませんけど、とにかく誰も素晴らしい言葉を言わないですよ。この言葉こそ、日本人がこれから社会に役立つ、平和の名士として活躍するならば、日本人こそこの言葉を金科玉条として、世界の指導者に「この言葉があるのを忘れたのか！」と言って、迫って行かなければならない。それほどの力を持った素晴らしい言葉です。心の中に平和の砦を築かなかったら離婚の激増も止まりません。幼児への虐待をも防げません。ましてや世界平和なんてありえない。**

**では一体、我々が心の中につくらなければならない平和の砦とは何か。一言で言えば、愛だ。もう少し詳しく内容を見れば、本当に我々が平和を望むならば、何が必要なのか。三つの重要な原理があるんですね。平和実現の三原則といって、感性論哲学で申し上げていることなんですけど、本当に人類が平和というものを願い、離婚の激増を食い止めようと思ったら、まず何が必要なのか。第一番目は、「理性の不完全性を自覚すること」です。自分が正しいと思っても、それは決して完全ではない、絶対ではない。自分の考えはどこまでいっても歪んだ偏見に過ぎない。「俺の考えは偏見なんだ」と自覚することによって、相手を説得して相手に勝とうとするのではなくて、相手から学ぼうとする愛が芽生えてきます。理性の時代という現実を廃棄して、早く我々が理性の不完全性に気づいて、そして自分自身が謙虚な理性を持って、他の考え方と向かい合う気持ちが出てこないと心の中の平和の砦はつくれません。**

**二つ目に大事なことは、「勝つことよりももっと素晴らしいことがある」。これまでは、勝たないかん、負けたらいかんという価値観で人類は競争して勝つということを最終の喜びとしてやってきました。もう競争して勝つということを目指す時代ではない。競争心こそ人間の心を蝕むものはない。競争心こそ人間の心を悪くするんだ。我々は競争して勝つことより、もっと素晴らしい目標を見出さなければならない。もっと素晴らしいこととは何なのか。それは力を合わせて共に成長することだ。だからこそ今は統合の時代なんですよ。相異なるものが統合、力を合わせて、そしてどれだけの相乗効果が出てくるか、ということを目標にして協力する。これも本当に平和を望むならば、心しなければならない重要な価値観の転換であります。勝つことよりもっと素晴らしいことは、力を合わせて共に成長することだ。だから、今世界は統合の時代になっているんだ。**

**最後の三番目は、これは先ほど申し上げたことですけど、「対立とはなんなのかということを皆がちゃんと知る」ということです。対立とは、自分が成長するために学ばなければならないものを持っている人間が、誰であるかを教えてくれるものなんだ。対立を経験することによって対立から逃げないで、対立に向かっていって、対立しながらも自分にないものを相手から探し出して、そして相手から学び取ることによって自分を成長させて、「君と出会えて良かった。君からこれだけ学び取ることによって僕はこんなに成長しました。ありがとう」と言って、敵に感謝をする。そういう新しい対立を乗り越える力を我々は獲得していかなければならない。対立という状況が出てきたならば、「俺はこの人から何かを学ばなければならない。この人は俺にない何かを持っているんだな。この人は俺にない何を持っているんだろう」という気持ちで、相手から自分にないものを見つけ出そうと努力をする。これも愛なんだ。とにかく、この三つが感性論哲学における世界平和実現の三原則であります。**

**世界平和だけではなくて、家庭の平和も大事。とにかく、理性の不完全性を自覚すること、勝つことよりももっと素晴らしいこと（勝つことよりも力を合わせて共に成長すること）がある、対立とはなんなのかということを皆がちゃんと知る。この三つが心の中に砦として築かれるなら、確実**

**に家庭も社会も世界も平和へと大きく前進することは間違いありません。だけどもまだ、三つともほとんどの人が知らない。世界の指導者も知らない。理性の不完全さも誰も知らない。勝つことよりももっと素晴らしいことがあるということも誰も言わない。まだまだ勝ち負けを争って喜んでいる。対立とは、自分が成長するために学ばなければならないものを持っている人間が誰かを教えてくれるものである、そういう意識で相手と向かい合うことを誰もしていない。この感性論哲学の平和実現の三原則は、これから人類が本当に成長し、西洋的な文明文化の在り方から脱却して、西洋文明よりももっと素晴らしい文明をつくっていくために、どうしても我々が心に持たなければならない大きな新しい原則であります。ぜひ、感性論哲学が持っている新しい考え方を知って、共に素晴らしい時代をつくっていくために頑張ってもらいたいと思います。今日はどうもありがとうございました。**